

【研究テーマ】

未来の創り手として、豊かに生き、社会で活躍できる子どもたちの育成  
 - 「公正・公平な教育の実現」「大里型PBLの創造」を通して -

1 グループ校の概要

大里中(24学級 生徒668名、教職員68名) 中田小(25学級 児童698名 教職員47名) 大里西小(29学級 児童775名 教職員59名)

2 研究の目的

「静岡型小中一貫教育」をグループ教育目標や教育構想を実現するための「絶好の手段」「有効な手段」、子どもたちに必要な資質・能力を育むための「必然の手段」と考えた。そして、2つの取組「公平・公正な教育の実現」「大里型PBLの創造」を通して、児童・生徒の「主体性」「協働性」の育成・発揮、それを支えるための教師の姿勢や役割を問い直していくことを目指す研究である。

3 取組内容

【令和3年度の取組】

- ◆ 「全体研修会(8/6)」で、既存のグループ教育目標を問い直すために、3校校長が提案した一次案について、グループ全職員が20のグループに分かれて協議・検討した。その結果をもとに、再提案と更なる協議を行い、年度末、**新しいグループ教育目標「未来の創り手として、豊かに生き、社会で活躍できる子どもたち」に変更した。**
- ◆ 校長間の協議や先進校への視察を重ねる中で、**2つの取組「大里型PBLの創造」「公平・公正な教育の実現」の推進を決定した。**育成する資質・能力を、「主体性」「協働性」以外に、誰もが「主体性」「協働性」を発揮するための**「レジリエンス(困難を克服する力)」**と「主体性」「協働性」から生まれる**「自己有用感」**を追加した。
- ◆ 7つの『小中合同プロジェクト型職員組織(以下「P J」)』を構築し、小中の職員間の意見交換を通して、2つの取組に対する理解が進み、小中共通の取組、活動が始まった。

【令和4年度の取組】

- ◆ 2つの取組について、軸となる取組「大里型PBLの創造」、土台となる取組「公平・公正な教育の実現」と位置付け、次のおり**本格的な実践が始まった。**

【大里型PBLの創造】

- ・ 「大里型PBL」の5つのポイントを参考に、総合的な学習の時間(生活科)において「大里型PBL」の実践が始まった。
- ・ 「第1回全体研修会(8/2)」で、3校の全15学年が実践の進捗状況を発表し合った。また、静岡大学の塩田真吾准教授の講演の中で、**PBLを実践する価値や子ども自身が自ら問いをつくる活動の大切さ**について意見交換をした。
- ・ 「第2回全体研修会(10/28)」で、大里中学校のPBLを中田小学校と大里西小学校の職員が参観。参観後のグループワークで実践の意見交換と「大里型PBL」で育成する資質・能力の絞り込みを行った。
- ・ 「PBL創造PJ」が中心になり、**「育成する3つの資質・能力」と「各学年の達成レベル」**を完成した。(年度末)

【公平・公正な教育の実現】

- ・ 職員に「小中一貫教育だより」を通して、公平・公正を目指す意味や**子どもへの適切な関わりを啓発**し続けた。
- ・ 「第3回全体研修会(12/22)」で講師を招き、「**RTIモデル**」や「**ABC分析**」についての理解を深めた。
- ・ 「特別支援教育啓発PJ」が、通級指導教室についての説明会や放課後デイサービスとの連携についての説明会を開催し、適切な就学支援への理解が深まった。

- ◆ グループの小5から中3までの児童・生徒と職員、保護者対象の**「小中一貫夢講演会(6/30)」を開催**した。講師は、植松努氏。「こうしたい」という意思=夢を抱くことの大切さを考えることができた。
- ◆ 令和5年2月、児童・生徒、保護者、学校運営協議員への**「リーフレット「グループ案内Vol.1」」の配付**を通して、2つの取組を中心としたグループの教育構想を示した。
- ◆ 7つのP Jについて、職員の意見を参考に、名称変更や新規P Jを新設し、9つのP Jが活動した。クロムブックの活用方法の意見交換、児童会と生徒会の交流、共通テーマでの学校保健委員会など、具体的な取組を実践していった。

【令和5年度の取組】

- ◆ 2つの取組について、前年度の取組を深化・発展する実践が、次のとおり、実施された。

【大里型PBLの創造】

- ・ 前年度末にまとめられた「前年度の学年カリキュラム」や完成した「育成する3つの資質・能力」と「各学年の達成レベル」を参考に、**3校全ての学年が、「課題設定」や「外部の専門家を活用」「本格的な発表の場の設定」などの場面でブラッシュアップした「大里型PBL」を実践**した。小学校を中心に、**教科の授業との往還**も進んだ。
- ・ 「第1回(8/2)・第3回(10/20)全体研修会」で、塩田准教授の講演「大里型PBLの創造にとって必要な教師の姿や役割」に基づく職員間の意見交換が行われ、理解が深まった。また、小中や小小の同学年同士で、実践の情報交換が行われた。

【公平・公正な教育の実現】

- ・ 職員は、「小中一貫教育だより」を通して、**子どもの「主体性」「協働性」を妨げる教師の不適切な関わりや言葉**を考えた。
- ・ 「小中一貫夢講演会(6/15)」を開催し、講師の藤原快瑤氏より、**平等と公平の違い**を講演していただいた。事後の振り返りや**道徳の授業**を通して、「公平・公正」の考えを深めることができた。
- ・ 「第2回全体研修会(8/4)」の静岡大学「山元薫准教授」の講演より、**公平、公正な教育を支える教師の子どもたちへの関わり**について考えた。

- ◆ 9つのP Jを6つのP Jに精選し、子どもたちの「主体性」「協働性」の発揮を支えるという視点で、実践が行われた。

- ◆ 「第2回全体研修会(8/4)」の静岡大学「山元薫准教授」の講演で話した言葉「安心の上には自信は成り立たない」より、**2つの取組「公平・公正な教育の実現」「大里型PBLの創造」を一体に捉える**ようになった。
- ◆ 令和5年11月、児童・生徒、保護者、学校運営協議員への「**リーフレット「グループ案内Vol.2」**」の配付を通して、「大里型PBLの創造」を通して、「主体性」「協働性」を発揮する子どもたちの姿などを紹介した。

## 4 考察(研究の価値と成果)

本研究を2年間、伴走していただいた静岡大学の塩田真吾准教授より、本研究について、次の5つの研究の価値を掲げた。

- (1) 「Society5.0」の到来に向け、グループ全職員で「どのような子どもたちを育成していくか」を協議し、**グループ教育目標を創り変えたこと**
- (2) PBLを取り組むためには『**公平・公正な教育(=誰もが安心して生活できる環境づくり)**』が土台と考えたこと
- (3) 教育目標の実現のためには、令和の日本型学校教育(個別最適な学び・協働的な学び)の推進が大切である考え、『**PBL(Project-Based-Learning)**』を小中一貫9年間の学びに取り入れたこと
- (4) 『**育成する資質・能力**』と『**各学年の達成レベル**』を設定し、活動の振り返りをする中で、9年間の系統的かつ段階的な資質・能力の育成を目指したこと
- (5) 子どもたちが身に付ける資質・能力として「課題解決力」よりも『**課題設定力**』に重きを置いたこと

このような価値だけでなく、研究発表会后、複数の参観者より『**単独校で行われてきた組織研修を小中一貫で実現できたことに価値がある**』という感想もいただいたことも成果であると考えている。

さらに、子どもの具体的な姿での成果を、静岡型小中一貫教育研究指定研究発表会の閉会式の終わりの言葉で、中田小学校の蒔田校長が、このように示した。

「大里型PBL」は、始めてわずか3年にしかありませんが、子ども自らが課題設定し、自己追究していく主体的な取組が見られるようになってきました。**小学校では、3校が共通して取り入れている午後の授業がない「地域の日」には、子どもたちが地域に出かけ、積極的に探究活動に取り組む姿も見られるようになって来ました。中学校では、不登校傾向の3名の生徒が、総合的な学習の時間は登校し、仲間と一っしょに活動するようになってきました。**このような、子どもたちの変容を見て、教師自身が授業観を変えていってくれるのだと思っています。

また、子どもたちへの意識調査(R5.9に実施)より、研究による成果が、次の数値に表れている。

調査①「安心して学校生活を送ることができる」	☞小学生91.2%	中学生89.0%
調査②「自分にはよいところがある」	☞小学生88.1%	中学生78.0%
調査③「学校生活を自ら進んで、一生懸命取り組んでいる」	☞小学生91.3%	中学生88.9%
調査④「人の役に立ち人間になりたい」	☞小学生94.6%	中学生94.7%
調査⑤「総合的な学習の時間(生活科)は楽しい」	☞小学生88.6%	中学生87.8%
調査⑥「総合的な学習の時間(生活科)は自ら進んで取り組んでいる」	☞小学生87.7%	中学生87.0%
調査⑦「総合的な学習の時間は(生活科)仲間の力を借りながら取り組んでいる」	☞小学生88.1%	中学生91.2%
調査⑧「クロムブックを有効活用して学習に取り組んでいる」	☞小学生96.0%	中学生91.8%
調査⑨「学校で自分らしく学んだり生活したりすることができている」	☞小学生91.9%	中学生91.0%

以上のとおり、「大里型PBL」の実践に関わる調査⑤⑥⑦の数値が、小・中学校共に高レベルである。また、全国学力学習状況調査の児童生徒質問紙(R5.4に実施)で「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」と回答した児童(小6)は、全国が『74.8%』に対して、本グループは『82.2%』・生徒(中3)は、全国が『72.8%』に対して、本グループは『87.2%』であることから、「大里型PBL」による「主体性」「協働性」の発揮が進んでいることがわかる。

グループ職員に対する調査結果からは、職員が、2つの取組「公平・公正な教育の実現」「大里型PBLの創造」を通して、子どもたちの「主体性」「協働性」の育成や発揮を支えようとする意識の高まりが感じられる。

調査A「学校教育目標を共有し、様々な教育活動を通じて、主体性と協働性を高めることができている」	☞ R4:91.1%	➡ R5:89.3%
調査B「生徒の個別最適な学びや支援を行い、公平・公正な教育を推進している」	☞ R4:88.5%	➡ R5:91.7%
調査C「生徒の主体性・協働性を育むために、探究的な学びに発展する「PBLの授業」を創造している」	☞ R4:70.1%	➡ R5:85.3%

## 5 課題と今後の方向性

<小中一貫教育全体の方向性>

- 「安心の上には自信は成り立たない」という考えの下、2つの取組「公平・公正な教育の実現」と「大里型PBLの創造」は一体であることを、今後も強く意識し、実践を進める。
- 研究を通して、縦のつながり(小中一貫)は強くなったが、本グループにおける横のつながり(地域連携)の在り方を明確化する必要がある。「大里型」の横のつながりについて、協議を進めていく。

<「公平・公正な教育の実現」に関わること>

- 小中一貫全体研修会や校内研修等で、「公平・公正な教育の実現」に関わる、人権や特別支援の考え方に関する研修(講演、グループワーク等)を実施する。
- 来年度も「小中一貫夢講演会」(R6.5.9を予定)を開催する。テーマは「共に生きる(=共生社会の実現・多様性(異文化))の理解」。道徳授業においても、「公平・公正」や「多様性の理解」の価値を深める。

<「大里型PBLの創造」に関わること>

- 「大里型PBL」に対する振り返りと来年度の取組を考える「ブラッシュアップ会議」や「大里型PBL」の理解を深める「キックオフ会議」をもとに、教師同士の対話を深め、児童・生徒が「Wonder(知りたい・やりたいと思う好奇心)」を活かした「PBL」を開発する。
- 「育成する資質・能力」を学年ごとに示した「各学年の達成レベル」を、児童・生徒の活動中に意識し、評価(意欲を引き出す働き掛け・声掛け)に活かす。